

□市民啓発型の災害図上訓練 DIG の概要と課題

三重県地域振興部消防防災課

1. DIG とは

DIG とは、ディザスター(災害)、イマジネーション(想像)、ゲームの頭文字を取って名付けられ「掘り起こす、探求する、理解する」という意味の英語 DIG に、「防災意識を掘り起こす、地域を探求する、災害を理解する」という意味を重ねたものです。行政と防災研究者の間で生まれ、平成8年度に当県がまとめた被害想定調査のデータを活用しながら、主に市民活動の中で実践・改良が重ねられ、現在の手法にまとめられたものでまさに官・学・民が一体となって産み出した防災トレーニングプログラムといえます。また参加者は自らの意見が地図上に整理され、対策が検討されることから非常に満足感が得られる一方、主催者はまとめられた成果が地元住民の手による防災マップとして活用が期待できる等、共に成果が得られる研修形態といえます。災害下の状況は一般的にはなかなかイメージし難いものですが、DIG に参加すると地図を前にして議論していくうち何を考え、何をしなければならないかをより具体的・多角的に理解することができるのです。さらに災害関連のビデオ映像等をゲーム開始前に見ることで災害下

の状況をイメージすることができ、より気持ちの入った議論になるでしょう。DIG を行う際に最も重要なのは被害想定調査を活用することです。当県が DIG を行う際使っている被害想定調査は町丁字単位で建物全壊数、死亡者数、出火箇所数等をシュミレーションしたもので、この調査を使うことで参加者は自分達の町がどのような被害を受けることになるか、具体的な数字を知ることができるため、リアリティのある議論をすることができるのです。

DIG を実施する際の準備物は地図を覆う為の透明シート、書き込み用の色とりどりの油性ペン、意見を集約したり地図に目印として貼り付ける為の大きめの付箋紙シート上の書き込みを消すためのベンジン、ティッシュペーパー等です。後は 10 人程度ごとのグループにわかれて、それぞれリーダー役や発表役、書記役などを決めておけばゲームをスムーズに進めることができますでしょう。

2. DIGの歩み

当県では、防災ボランティア団体が主催し、県等の行政機関が協力するスタイルでDIGが行われてきました。始まりは平成9年3月21日、県医務福祉課と県社会福祉協議会の共催により開催した福祉救援ボランティア活動研修会に引き続いて、ボランティア団体主催で当県が被災地になったという想定のもと「ボランティア受け入れワークショップ」が行われたとき、当時防衛庁防衛研究所の小村隆史研究員が講師として招かれ、自衛隊が行っている指揮所演習などのノウハウを参考に地図と透明シートを用いて書き込みを加えながら行うDIGの原型をもたらしたことです。その後、県消防防災課と県内の防災ボランティア団体のメンバーがゲーム感覚のイメージトレーニングとして進化・発展させてきました。

平成9年の実施状況

5月14日防災ボランティアネットワーク松阪が「災害ボランティア学習会」を同グループ発足後初の会合として松阪市で開催し、県の被害想定調査を使ったDIGを実施。

6月13日震災ボランティアネットワーク伊賀が「震災ボランティア受け入れワークショップ」を上野市で開催した時にDIGを実施。

7月21日災害ボランティアネットワーク鈴鹿が「被害想定マップにおける合同机上訓練」を鈴鹿市で実施。そのときのDIGの様子はケーブルテレビ局が市民向け自主制作番組として放映。

11月14日防災ボランティアネットワーク松阪が再びDIGを実施。

12月6日災害図上訓練 in 東紀州が「三

重県津波シンポジウム」の関連イベントとして開催。

このように平成9年3月のはじまりから5回にわたりDIGが実施され、その有効性が参加者達の間知れ渡るようになりました。

平成10年の実施状況

1月17日には県下の防災ボランティア団体が集まり災害救援ネットワーク(NAD みえ)を結成したことで、DIGのノウハウは県下にさらに広くひろがることとなりました。

3月6日結成されたNADみえのメンバーも参加して三重県立看護大学の研究事業「地域ケアシステム」の一環として紀伊長島町で津波想定DIGを開催。

5月17日災害ボランティアネットワーク鈴鹿の呼びかけに応じた市内の自治会が参加しDIGを実施。

9月1日伊勢市で行われた県総合防災訓練に併せて災害ボランティアネットワーク鈴鹿が小学校でDIGの紹介も含めた防災教育を、防災ボランティアネットワーク松阪が総合防災訓練会場内でDIGを実施。

以上のように平成10年には各ボランティア団体がDIGの対象を自治会の人達や小学生といったボランティア以外の人達に広げて行くと共に、県総合防災訓練のなかでもボランティアによるDIGが行われるようになりました。

平成11年の実施状況

3月1日「紀伊長島町中ノ島地区における災害図上訓練」(主催:中ノ島地区自治会)を県立看護大学地域交流研究センターのコーデイネートで実施。

3月14日災害ボランティアネットワーク鈴鹿が災害図上訓練と現地灘需要調査を融

合させた新しい形の

DIG を試みた。

6月13日県下の災害ボランティア団体9団体のネットワーク組織であるNADみえ主催の伊賀広域震災ボランティアフェスティバルが開かれ、自衛隊、警察、消防、県も参加しボランティアセンターの運営や炊き出し等の訓練に併せてインターネットを取り入れたDIGを実施。

8月20日桑名防災支援ネットが県総合防災訓練開催地である長島町の地図を使い被災地支援二に行くボランティア団体の立場からDIGを実施。

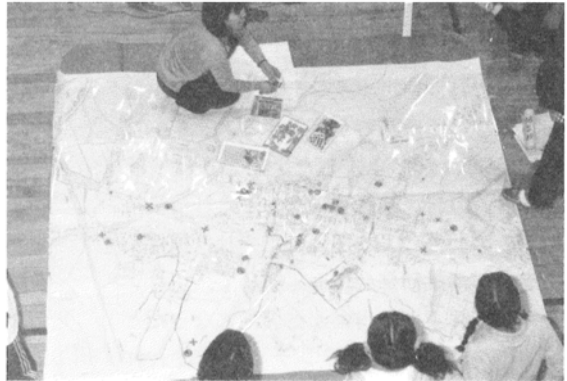
8月25日防災ボランティアネットワーク松阪が県、市、消防本部、自主防災組織の代表者によるDIGを実施。市街地、山間部、臨海部の3枚の地図を使いそれぞれの地域特性に基づく災害の想定と防災の備えについて話し合った。

12月5日全国の災害ボランティアが県消防学校に集まった「第1回全国率先市民みえサミット」の分科会で、石薬師高校の体育館を会場に地元の住民、子供たちを対象にDIGを実施。

平成11年はDIGの中にインターネットを取り入れる試みが行われたほか、新たに結成された災害ボランティア団体においてもDIGが行われるなど、一層の広がりを見せました。

平成12年の実施状況

平成12年にはこれまでDIGを実施する際、サポート役が多かった県が主体的にDIGの実施に取り組むようになりました。



「全国率先市民みえサミット」でのDIG風景



子供たちも参加

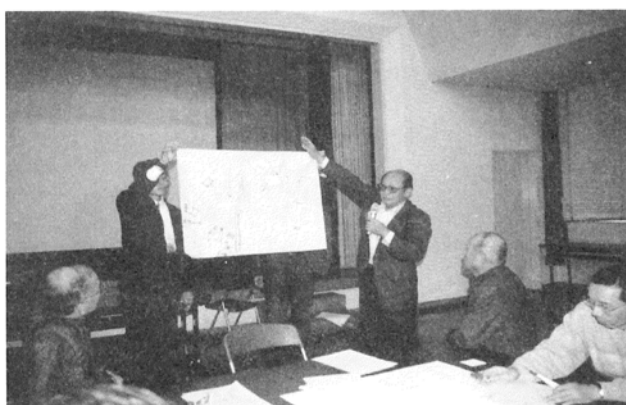
毎年県内5箇所の地方機関の庁舎に地元の自主防災組織の代表者に集まってもらい、「自主防災組織リーダー研修会」を実施していますが、昨年までは救急法の研修をメインにしていたものを今年は初めてDIGを実施しました。参加者は自分たちの住んでいる地域の地図を見たとき、こちらが開始を宣言する前から地図を囲んでの熱心な議論が始まります。その際自分の住んでいる地域の地図を使うのとそうでない地図では参加者の乗りが違ってきます。参加者の住んでいる地域の地図を使わない場合は参加者全員でその地図の地域を歩いて

周り、町の危険箇所や避難所の状況、消火栓などを確認してからDIGを実施するという方法もあります。実際の作業は、まず最初に地図上に避難所となる小学校や公民館、消火栓や消防署等を次々と色とりどりのサインペンで色塗りしてもらった後、地震発生3秒後、3分後、3時間後の状況を付与していきます。例えば〇〇市では全壊戸数何戸、死者何名、火災何件発生等の被害想定調査の数字から抜き出した数字を読み上げて参加者に地図上へ付箋に書いて貼ってしてもらいます。それらの状況下で自分の町はどうなり、自分はどうのように行動するのかを考えてもらいます。そうやって2時間ほど議論をした後でそれぞれの班から発表してもらうのですが、終了後のアンケートや参加者の話を聞く限りでは「是非地域の自治会でも実施したい」という意見が沢山出るなど、防災に関する成果は出ているのではないか、と思われます。

さらに今年からの新たな取組みの二つ目として県の新規採用職員全員に対して防災研修を1泊2日を実施し、その中でDIGを行うようになりました。県の災害対策本部員になったと仮定し、次々と寄せられるヘリコプター等からの情報を整理したり、通行不能道路の情報を地図上に書き込んでいくという作業や重傷患者の搬送方法を考えさせたりする作業を行ったところ、昼間から



自主防災組織リーダー研修会でDIGを実施



検討内容を発表する参加者

長時間にわたる研修にも関わらず、夜遅くまで白熱した議論が続きました。このようにDIGを使った研修は今年度から始まったばかりですが、一応の成果をあげています。

3. DIG の今後

当県ではこの DIG を県民の皆さんに対して幅広く実施し、防災知識を深めるためや、防災意識を高めるために使っていこうと考えています。また当県の特徴として行政が実施するだけでなく、防災ボランティア団体の人達が自分たちで主催するイベントで、この DIG を盛んに実施していることが上げられます。県はそれらのイベントとバックアップをしたり色々な形で参加していますが、基本的には各ボランティア団体の自主的な運営に任せています。

このように当県においては行政だけが防災啓発を行っているのではなく、民間との協働による防災啓発、防災思想の普及活動が行われているといえます。

今後各市町村、各市町村社会福祉協議会等にもこのゲームを取り入れた防災関係事業を実施してもらい、ますます幅広く浸透させていき、三重県全体の防災力向上をはかっていきたいと考えています。

参考資料

「災害図上訓練 DIG マニュアル」DIG マニュアル作成委員会